

現代聖餐論における 「キリストのからだ」 —ヘンリ・ナウエンを中心に—

“The Body of Christ” in Modern Eucharistic Theologies:
A Focus on Henri Nouwen

徳田 信
Makoto Tokuda

キーワード

ヘンリ・ナウエン、聖餐、キリストのからだ、共同体、第二バチカン公会議

KEY WORDS

Henri Nouwen, Eucharist, Body of Christ, Community, Second Vatican Council

要旨

本論考では、第二バチカン公会議や現代神学を参照しつつ、ヘンリ・ナウエンの聖餐論に焦点を当てる。ウォルフハルト・パネンベルクやウィリアム・ウィリモンは聖餐をまず食卓の交わりと教会形成の手段として理解したが、それは公会議や現代カトリック神学の志向と通底している。この潮流に棹差すナウエンは、日常性を重視する聖餐理解を示しつつ、有機的なキリスト教共同体の姿を描き出した。かかる共同体は身体性を重視したものであるが、それはナウエンがラルシュ・デイブレイクでの生活を通して体験的に身につけたものである。ナウエンの思想と実践は、日常的な食卓の交わりと結びついた聖餐を通じての「キリストのからだ」なる共同体の形成という、現代キリスト教霊性の一つのかたちを例証している。

SUMMARY

In this paper, the author focuses on the Eucharistic theology of Henri Nouwen, giving consideration to the Second Vatican Council and various aspects of modern theology. Wolfhart Pannenberg and William H. Willimon saw the Eucharist chiefly as an event of

table fellowship and a means of church formation. This view has common ground with that maintained in the Second Vatican Council and contemporary Catholic theology, both of which have had an influence on Henri Nouwen. While showing his understanding of the Eucharist with an emphasis on its ordinariness, Nouwen successfully provides a picture of an organic Christian community. Corporeity, valued in such communities, is what Nouwen himself rediscovered through his days at L'Arche Daybreak, and it is reflected in his understanding of the Eucharist. His ideas and practices illustrate one approach to contemporary Christian spirituality, in which communities as "the Body of Christ" can be created through the Eucharist as table fellowship in our daily lives.

1、共同体を志向する現代聖餐論

ヴォルフハルト・パネンベルクは『キリスト教霊性』（1986年）において、今日の人々は共同体の経験それも究極的に宗教的性格の経験を求めていると主張する¹。そして、真正なるキリスト教会の概念としての「キリストのからだ」を回復させることが、その求めに応えることになると言う²。その上でパネンベルクは、この課題に取り組む糸口として聖餐理解の再検討を試みる。聖餐は、カトリックでは伝統的に「罪のための贖いの供え物の儀式」とされてきた。プロテスタントの改革派では「ふさわしくない者の陪餐禁止」に見られるごとく、罪人を除外したかたちでの聖徒の交わりとして行われた。ルター派でも、個々人にたいする罪の赦しの確証として祝い、行うという仕方で理解した。パネンベルクはこのように整理しつつ、それらはみな個人主義的に歪曲された聖餐理解であるという³。

ウィリアム・ウィリモンもまた、個人主義的な聖餐理解に警鐘を鳴らす一人である。ウィリモンは、一つのパンに代えて個別の小さなパン切れを用いたり、一つの杯に代えて個別の小さなグラスを用いたりするところに、礼拝の個人主義化が表れていると主張する⁴。それは、中世カトリック教会でミサの形式と手順を通して「聖なる物」を造り出すことに熱中していたことと軌を一にする⁵。しかし、そもそも、第一コリント11章17節以下の文脈で言及されている「主のからだ」とは、「キリストのからだ」なる教会を示す類比表現であるという⁶。教会は歴史上、聖餐においてキリストはどのように臨在するかについて繰り返し議論してきたが、ウィリモンによると、キリストの「真の臨在」とは、（その死と復活の力によって形成された）礼拝共同体のただ中において生起する出来事なのである⁷。

ウィリモンはまた、神が日常的な事柄と見なされるパンや葡萄酒や水を用いて、理

解しがたい自身の愛を人々に示す手段こそが sacrament であると言う⁸。その点で、アウグスティヌスが自分の会衆に向けて語ったという次の言葉を高く評価する。「あなたは聖餐式においてパンを味わうとき、次のように自問することが起こるかも知れない。『この味は私が今朝の食事で味わったパンと似ている。(…ということは)あのパンもまた聖なるものだったのだろうか?』この問いに対して、教会は『まさにその通りである』と答える」⁹。聖餐は sacrament のひとつに数えられるが、そうであるがゆえに、まずもってキリストを想起しつづなされる日常の食事に基づくということである。

聖餐をまず食事と結びつけるのはパネンベルクも同様である。彼は聖餐をまず、イエスが弟子たちと行っていた日常の食事、そしてパリサイ人や「取税人や罪人たち」を招いた食事を通じてなされたところの神の国運動と結びつけて理解する¹⁰。その上で、このような神の国運動の共同体性は「最後の晩餐」における犠牲のシンボリズム(1コリント11:23)と切り離せないという。イエス・キリストがこの世に自身を差し出したその犠牲的献身によって、信仰者はキリストとの交わりに入る。そして今度は、信仰者がキリストに自分を差し出すその献身を通して信仰者同士の交わりを作り出すという¹¹。かかる交わりを共同体と捉えるならば、それは教会論と結びつく。パネンベルクもウィリモンも、「キリストのからだ」として食す聖餐のパンを、「キリストのからだ」なる教会共同体との関連で把握するのである。

パネンベルクはまた、教会を終末論的目標としての世界的な一致(世界共同体)のシンボルと捉え、聖餐をその終末論的一致をシンボライズするものとして捉える¹²。聖餐はこうして、相互聖餐を通じた教派間的一致を視野に入れるべきものとされる。足元の小さな交わりとしての共同体形成の課題と、世界レベルでの共同体形成(エキュメニズム)の課題がここに聖餐論として結びつく。そしてパネンベルクによると、そのような聖餐理解が見いだされるのは世界教会協議会(WCC)から出された一連の書物、そしてローマ・カトリックの第二バチカン公会議(1962-1965年)の公文書群においてである¹³。

公会議で発布された『エキュメニズムに関する教令』(1964年)では、「すべてのキリスト者間の一致を回復するよう促進することは、聖なる第二バチカン公会議の主要課題の一つである」¹⁴とし、かつて異端視していたプロテスタント諸教会を「分かたれた兄弟」と表現するに至った¹⁵。また『現代世界憲章』(1965年)は、「父のみ心とは、われわれがすべての人の中に兄弟キリストを認め、ことばと行いをもって実際に愛し、こうして真理であるかたについてあかしし、天の父の愛の神秘を他の人々と分かち合うことである」¹⁶と述べる。公会議においてカトリックは、キリスト教諸派、さらには人類全体に及ぶあらゆる他者の内に神の働きを認め、言葉だけでなく実際の

行いを通して愛し合うべきことを語った。

このように高まったエキュメニズムの機運は、時に、カトリックとプロテスタントの間の人的交流の拡大や、神学の相互接近へと導いた。その点で、ヘンリ・ナウエン(1932-1996)が1974年にイエール大学神学校で終身在職権を与えられたことは、一つの典型と言えよう。ナウエンはその時すでに叙階されたカトリックの神父であったが、当時の教授陣にカトリックの教員はほぼ皆無であった。伝統あるプロテスタントの神学校がナウエンを招聘し、ナウエンもその招聘を受けたことは、20世紀に高まったエキュメニズムを象徴している¹⁷。

ナウエンはまた、実際の行いを通して愛し合うべきという公会議の精神を具体的に生きようとした人物であった。多様な人々と深い関わりに生きることを求めたが、それゆえに交わりの破れにも苦しんだ。そのようなナウエンは正式な典礼に留まらず聖餐を事あるごとに行っていた。聖餐が **Holy Communion** と称されるように、そこには真実な交わり (**communion**) への渴望が読み取れる¹⁸。キリスト教を知的事柄に留められず、神の愛と人の愛を「からだ」で追い求めたナウエンは、現代におけるキリスト教霊性の一つのかたちを体現した人物であった¹⁹。

本論考では、現代カトリックの潮流に乗り自らの思想を構築していったナウエンの聖餐論を、彼の生涯をたどりつつ検討していく。その目的は、上述のプロテスタント神学者たちが示した理解、すなわち「キリストのからだ」の概念において聖餐と共同体を結びつけて捉える理解が、公会議以降のカトリック思想に通底し、さらにナウエンによって体験的に深められていったことを明らかにすることである²⁰。

2、ナウエン聖餐論に与えた現代カトリック思想の影響

ナウエンは生前最後に出版された『この杯が飲めますか』(1996年)²¹において、聖餐の杯(カリス)のイメージをもとに自身の人生を振り返っている。それによると、ナウエンは六歳のころから将来司祭になりたいと強く願っていた。親類にはアントン神父がおり、この叔父のようにミサを捧げることが出来る日を密かに夢見ていた²²。そして1957年、25歳の時にナウエンは司祭として叙階され、夢は実現した。叔父アントンはその時、親族内に新しい司祭が出たことへの感謝のしるしとして、自分で使っていたカリスをナウエンに贈った²³。しかし後に60代のナウエンは述懐する。

私の叙階から35年間に、あまりにも多くのことが起こりすぎて、あの金で飾られたカリスは、もはや私の現在の生き方を象徴するものではなくなっていました。…司祭しか触られず、使うことが許されなかった、あの貴重な金のカリス

は、中のワイン²⁴が見えて、誰でもそれを飲むことができる大きなガラスのコップにとって変わっています。このガラスのコップは、司祭の、そして人間の新しいあり方を示しています²⁵。

金の立派なカリスは聖職者が権威をもってミサ全体を支配することを象徴し、大きなガラスのコップは主の食卓に集まったすべての人々の分かち合いと、聖職者もその一部に含まれる共同体（交わり）を象徴している。この変化の契機となったのが、ノウエンの叙階後まもなく開かれた第二バチカン公会議である。そこで最初に出された『典礼憲章』（1963年）では新たな典礼（聖餐）理解の方向性が打ち出された。典礼における聖書の重要性が語られ、世界各国がその土地の言語で行うことに道が開かれた²⁶。また司祭は従来、会衆に背を向けてミサを行っていたが、会衆に直面して行うようになった²⁷。公会議はノウエンの聖餐理解、そして歩みそれ自体に大きな転換を促すものとなった。

公会議とノウエンを直接結びつける人物として、叔父アントンと、ノウエンを叙階したオランダの枢機卿であり大司教のバルナルド・アルフリンクが挙げられる。ノウエンは叔父アントンが公会議に呼ばれた時に同行し、公会議のいくつかのセッションに参加する機会を得たことで、公会議の雰囲気を感じ取るようになった²⁸。そして、アルフリンクは教会政治のあり方について公会議を牽引する立場に就き、教会が権威主義的なトップダウンではなく一般信徒の声を取り入れるべきことを訴えた²⁹。彼はノウエンにローマで勉学を続ける道を提示したが、ノウエンは逆にナイメーヘン大学で心理学を学ぶことを申し出た。心理学と神学の統合は時代を先取りするもので、ノウエンは後にこの分野で大いに名声を得ることになる。その道を開いてもらったノウエンはアルフリンクと近い関係を持ち続けた³⁰。

第二バチカン公会議の方針は世界各地ですぐに受容されたわけではない。オランダのカトリック界では公会議の反動に見舞われ、アルフリンクと近いノウエンも批判的な目で見られた。しかしノウエンは「自由の地」アメリカに活動の場を定めることで新しい潮流を独自の仕方で展開していった³¹。その展開の一つが聖餐における「パンとワイン」の理解である。公会議が始める以前、神学生のノウエンは毎日ミサに出席し、伝統的なローマ典礼でミサを司る訓練を受けていた³²。しかしその後、公会議を端緒とする聖餐理解の変化の機運に後押しされ、より自由に聖餐を捉えていく。公会議から数年後、ノウエンは最初期の著作『クリエイティブ・ミニストリー』（1971年）において次のように聖餐を語っている。

パンとワインによって、自然すべてがそれ自体を超えた事実を指し示しているサ

クラメントであると悟るまでは、パンとワインのサクラメンタルなしるしの意味を十分に理解することは決してできないだろう。聖餐におけるキリストの現存が「特別な問題」になるのは、成長すること、生きること、死ぬこと、これらすべてのうちにある彼の現存に対するセンスを私たちが失ったときだけである。日曜日の祭儀で起こることが、私たちを取り巻く世界で日々絶えず起こっていることに十分に気づかせてくれるとき、それは真の祝祭となる³³。

ナウエンはサクラメントつまり聖餐を、まず特別な問題とするのではなく日常世界の次元で受け止めるとともに、礼拝共同体の出来事として表現している。これはウイリモンのサクラメント理解と通底するが、ナウエンがこの理解に達したのは、カトリック聖餐論の核である「実体変化」の新たな把握の仕方と結びついている。

実体変化は、キリストの言葉の力によってパンとワインがキリストの体と血に変化する、あるいはなるとする考えで、中世ではアリストテレスの「偶有的属性」と「実体」の概念で表現するようになった³⁴。しかし現代のカトリック神学者たちの中からは、異なった仕方で聖餐を提示しようとする動きが出てきた。その代表的人物の一人がエドヴァルド・スヒレバークスである。彼は『ユーカリスト』（1968年）³⁵において、実体変化を現象学的に解釈し直すことを試みた。すなわち、実体的に変化したのはパンの物理的リアリティではなくパンの機能や意味であり、その変化はキリスト自身の権威に基づくものであると訴えた³⁶。スヒレバークスは、B. ヴェルテから得た着想として、次のように例証する。

着色された布は純粹に装飾のためのものである。しかし、もし政府がそれを国旗のレベルにまで高めると決定するなら、その同じ布が実際に、そして客観的にもはや同じものではなくなる。物理的には何も変化していないが、その存在が本質的に変化している。…ユーカリストの場合にも、新しい意味がパンとワインに与えられるのだが、それはいかなる人によるのでもなく、神の御子によるのである³⁷。

スヒレバークスによると、パンと葡萄酒が何であるかということは、それを使用するコンテクストを通してはじめて語り得る。イエス・キリスト、特にその十字架前夜の出来事が語られる場で用いられるとき、パンとワインはキリスト教信仰のもっとも基本的なことを力強く想起させるものとなる。関係が変わることで、ものの存在それ自体が変わるのである³⁸。スヒレバークスによると、しかし、これは決して新奇な考えではない。彼が提示した聖餐理解は本来トマス・アキナスにも見出されるもので

あり、自説はその回復であるという³⁹。実体変化の教義自体を否定することなく、新しく提示し直したのである⁴⁰。

それは公会議の精神を生かそうとするスヒレバークスなりの試みと評価できる。『現代世界憲章』によると、「新たな状況は宗教生活にも影響を与えている。…より厳密な批判能力をもつ者は魔術的世界観や、今なお残存する迷信を宗教生活から取り除き、日増しにより人格的かつ行動的な信仰を要求する」⁴¹。現代人にとってカトリック教会は時代遅れな存在であり旧来のあり方はもはや通用しない、という危機感がここに表出されている。スヒレバークスの「実体変化」論は、従来の魔術的世界観を払拭する一種の換骨奪胎の試みであった。

スヒレバークスはオランダの司教たちに助言を与えることで公会議に多大な影響を与えた。「実体変化」論の他にも、ミサの使用言語をラテン語から各地域の言語に切り替えるべきことや一般信徒の役割拡大を提起した。そして、このスヒレバークスの強力な援護者となったのがアルフリンクである⁴²。二人はオランダのナイメーヘン大学の同僚であった。さらに、スヒレバークスがそこで教鞭を取り始めた同じ年にノウエンは同大学で学び始めている。ノウエンはその点、スヒレバークスからも少なからぬ影響を受けたと言える⁴³。このように、聖餐論を含むノウエンの基本的な思想は、現代カトリックの大きな変化の流れに棹差したものであった。

ノウエンが自らの聖餐理解をまとめたかたちで世に問うたのは、しかし、先述の『この杯が飲めますか』と、同じく晩年近くにかかれた『燃える心で 聖餐をめぐる黙想』（1994年）⁴⁴のみである。ノウエンはイエール大学やハーバード大学で教員として名声を博したが、悩んだ末、障がい者共同体ラルシュ・デイブレイク（カナダ）に司牧者兼介助者として移った。ノウエンはそのこのチャペルで低い祭壇を用い、座って聖餐を行うようになった⁴⁵。神学思想としてのみならず、ラルシュでの経験を踏まえて書かれたのがこの2冊である。

3、有機的共同体を生み出す食卓の交わり

ノウエンは『燃える心で』において、ルカ福音書24章の「エマオの途上」の話を通じて聖餐論を物語っていく。エルサレムでイエスが処刑された後、途方に暮れた二人の弟子はエマオ村に下っていた。そこにいつしかある人物が加わり、旅の仲間となる。二人はエマオに着くと、途中で同伴したその人物を家に招く。そこで食卓を囲んでいるとき、その人物が復活のイエスであることに気づく。そして二人はエルサレムに喜び勇んで戻って行くという話である。

ここでノウエンは、聖餐をまず日常の食卓と結びつけて提示する。「あなたはパン

を取り、感謝し、裂き、そして与える。そのためにパンはあるのだ。…何も新しいことはなく、驚くようなことも何もない。…おそらくわたしたちはユーカリストが、人間の素朴な行為であることを忘れてきてしまったのだ⁴⁶。食卓の交わり、それは一義的には特別な儀式の場ではない。しかしその最も日常的な場こそ、人間社会のあり様が縮図となって現れる場である。それは文化人類学でいう「共食」(commensality)を思い起こさせる⁴⁷。

「食卓は家族全員の親しみが表される場所だから、その親しさに何か欠けたところがあると、一番ははっきり表れるのが食卓である」⁴⁸。そうナウエンは述べてつ、キリスト者の食卓がもし悲しみの影を落としているならば、それはイエスを喪失しているからであると言う。イエスは死の前夜、弟子たちと共に食卓についた。そしてイエスは十字架の死に赴いた。三日後にイエスは復活したが、二人の弟子はそれを知らなかった。かつて彼らはイエスと日常的に食卓を囲んでいたが、今はイエスの欠けた食卓を囲もうとしている。イエスはそんな二人の間に入ってきて自らを露わにしたが、そこで一つの変化が起こる。「イエスは弟子たちの客であったのに、彼らの家に入るやいなや、イエスが彼らに代わって客人をもてなす主人となられたのである。そして主人となったイエスは彼らをイエスとの完全な交わりに入るようにと招かれる」⁴⁹。食卓にイエスを迎え入れるならば、かえってイエスによって迎えられる。そして、イエスを迎えた食卓ではパンとワインは特別なものとなる。

さらにナウエンは、パンをイエスの肉体と、ワインをイエスの血と同一視する伝統的な聖餐理解と結びつけて語っていく。「神がイエスの中に完全にご自分を現されるように、同じようにイエスはユーカリストのパンとワインの中に、完全に自分を現存させられる。…神は今、このユーカリストの中で、わたしたちが共に囲むこの食卓において、この時、わたしたちのために糧となり飲みものとなられるのである」⁵⁰。ナウエンはこのことを伝統的な受肉と犠牲のイメージに訴えて語る。「受肉とユーカリストは自己を与える神の大きな愛の二つの表現である。十字架上の犠牲と、食卓における犠牲は、一つの犠牲であり、神が時と空間を超えて、すべての人類に届こうと手を伸ばされご自身を与えられる一つの完璧な行為である」⁵¹。神がイエスにおいて受肉したように、今日、神はイエスを主人とする食卓で受肉する。同時に、イエスが十字架において犠牲となったように、今日、食卓において神は犠牲になるという。

スヒレバークスと同様に、ナウエンは伝統的な理解をいたずらに損なうことなく、パンやワインが食卓で果たす意味合い（その場の関係性から生み出される役割）から聖餐を捉えなおそうとしている。イエスが食卓の主人となることで、その場のパンとワインは変化する。パンとワインを食卓の客に差し出すとは、食卓の主人がそれらに受肉して自身の存在を差し出すことであり、イエスはこうして聖餐の食卓で犠牲とな

るというのである。

聖餐を神の犠牲的献身の表現と捉えるナウエンは、「わたしたちと完全に一つになりたいと神が望んでおられる」と言う⁵²。「神はこの交わりを可能とするために、遠くまですべての道のりを行かれるのである。神は人の世話に頼る一人の子どもとなり、ガイダンスが必要な少年となり、生徒を探す教師となり、後に従う者を呼び求める預言者となり、そしてついには兵士の槍に突かれて死に、墓に納められた死体となった」⁵³。かつてアウグスティヌスは、神を求める人間の姿を表して、「わたしたちの心は、あなたのうちに安らうまでは安んじない」という言葉を残した⁵⁴。しかしナウエンは言う。「まるで神がわたしたちに向かって叫んでおられるようだ、『わたしの心はお前の内に憩うまでは休まることはない、わたしの愛する子供たちよ』」⁵⁵。ナウエンによると、人々が神を求めるより前に、まず神が人々を探し求めている。人々の食物となるまでに。

こうして与えられるイエスとの交わりは、しかし、個人的な満たしで終わらない。「イエスとの交わりはイエスのようになることを意味する。イエスと共に十字架につけられ、墓に横にされ、旅の途中で迷っている旅人たちと共に歩むため、イエスと共によみがえさせられる」⁵⁶。そしてイエスと食卓で交わった者は、ちょうどエマオ途上の二人にイエスが近づいて行ったように、他の人々の同伴者となる。そして同伴者になるには食卓を囲む関係に入らなければならない。こうしてイエスを中心とした食卓は席に着く人数を増し加え、共同体（コミュニティ）が形成されていくという。

このようなナウエンの共同体理解は、第二バチカン公会議が描いた教会像を踏襲しつつも、ある面で踏み越えたものであった。公会議は『教会憲章』（1964年）において、 sacrament、「神の民」、コムニオ（交わり）等の側面から新たな教会理解を宣明した。これらの理解が従来からの大きな転換を示していることは事実である。しかしナウエンの思想と実践に照らすことで、ある種の限界も看取される。

『教会憲章』によると、「教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるし、道具」とされ、教会は秘跡的なものとして表現された⁵⁷。教会の秘跡性（ sacramentalであること）が意味するのは、教会が、「神との親密な交わりと全人類一致」のしるしと道具として、神との一致と世界の人々との一致という二重の目的のための手段と見なすということである⁵⁸。『教会憲章』はまた、「神の民」なる教会を、カトリック教会の成員のみならず他教派のキリスト者、さらにはすべての人が含まれ得るものとして提示した⁵⁹。それは、コムニオ（交わり）としての教会理解に結びついている。教会は三位一体なる神の像であり、その三一神のコムニオと密接不可分なものとして「神の民」のコムニオが教会だとされた⁶⁰。

しかし注意すべきは、コムニオとしての教会はすべての人々に開かれているとしな

がらも、一義的にはあくまで位階的のコミュニオとして捉えられていることである⁶¹。その背後には、ローマ・カトリック教会こそが唯一のキリスト教会であるという前提があり、他の諸教派を含めすべての人々はこの位階的の制度としての教会に包括されるべきものとして理解されている⁶²。また、そもそも教会をサクラメンタルな存在と見ること自体にも、制度としてのカトリック教会を絶対視する危険をはらんでいる。その点を看取したスヒレバークスは、教会ではなくイエス・キリストこそが「原サクラメント」であると主張した⁶³。

ナウエンもまた、カトリック司祭でありながら位階的の制度を前面に出して教会を語ることはしない。「わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです」(1コリント10:16-17)という言葉を引きつつ、ナウエンは次のように述べる。「この新しい体は愛の聖霊によってつくられた霊の体である。それはとても具体的な方法で現れる。赦しの中に、和解の内に、お互いの支えあい、困難の中にある人への援助、苦しんでいる人々との連帯、ますます多くの人々の中に拡がっている正義と平和を求める関心の中に、この霊の体が現れる」⁶⁴。

ナウエンは、制度的教会という大きなところからではなく、まさに食卓を囲むような小さなところで営まれる日常の生を出発点に、「キリストのからだ」を体現する共同体を考えるのである。

4. 他者を通じた神との「出会い」

ナウエンによると、このような共同体は自然なかたちで「宣教」の働きと結びついている⁶⁵。イエスはその宣教活動において共同体(コミュニティ)を形成していったことを念頭に、ナウエンは次のように述べる。「あなたが神と親しく交わりつつ生活し、コミュニティの中で人々と一緒にいれば、それは宣教であるということです」⁶⁶。「宣教とは、神に対するあなたの愛と、同じ仲間へのあなたの愛があふれ出すことです。ある人が私にこう言いました。『宣教とは、ワインを満たしたグラスで二人が乾杯したとき、飛び散るワインのようなものだ』」⁶⁷。聖餐のワインがコミュニティ経験を豊かにし、その豊かさが周りにも広がっていくイメージで宣教が語られている。

ナウエンにとって、宣教とは喜びの分かち合いであって、自分が既に得ている真理を相手に教え込むようなものではない。「イエスとの交わりは共同体の始まりだった。しかし、それは始まりに過ぎない。彼らは、イエスがよみがえったことを同じように信じている人々、やはりイエスに出会い、イエスは生きていと聞いた人々に会う必要があった」⁶⁸。そう述べつつ、エマオ村でイエスと出会った二人の弟子がエルサ

レムに喜び勇んで戻った時、他の弟子たちが既にイエスと出会っていたことに注意を向ける。「友人たちはすでに知っていた。彼らが運んでこなければならなかった良き知らせは、友人たちにとってまったく新しいものではなかったのだ」⁶⁹。

ナウエンは、自分だけがイエスに出会ったと思い込むことを戒める。自分たちの理解や実践の領域以外の部分においてもイエスを見出している人々がいることを想定せよ、というのである⁷⁰。ナウエンは言う。「まずわたしたちは人々の語ることを聴かなければならない。その後ではじめてわたしたちの物語を語り、喜びを運ぶことができる」⁷¹。二人の弟子は、エルサレムにおいて、他の弟子たちがすでにイエスに出会ったその物語を聞くことになった。その上で、「自分もイエスに出会った」と証ししたのである。

ナウエンによると、イエスの精神に生かされた共同体は、イエスの道について多くの物語が語られる場である⁷²。宗教的屬性に捕らわれず、個々人それぞれが固有に持っている物語に、まず真摯に耳を傾けることが求められるということである。ナウエンは言う。

宣教とは、他の人々のところに行って復活の主のことを伝えるだけでなく、わたしたちが遣わされる人々から復活の主に関する証しを受けることでもあるのだと気づく。宣教とはしばしば与えるという意味に限って考えられがちだが、本当の宣教は受けることでもある。…イエスの霊は吹きたいところに吹くというのが真実であれば、そのイエスの霊を与えることのできない人は誰もいないということだ⁷³。

イエスの霊（聖霊）は自由に働くのであり、それゆえにあらゆる人から神の道を学び得る。ナウエンがこのことを経験的に学んだのは、イエール大学で教鞭を取っていた頃から足を運び始めていた中南米においてであった。現地では、日常的な交わりを土台とする「キリスト教基礎共同体」に支えられた解放の神学が勃興していた。その主唱者グスタボ・グティエレスから自著の序文を書くよう依頼されたナウエンは、そこで次のように記している。

何か与えるものがあると期待して、私は彼の地に赴きました。しかし私がそこですぐに見出したのは、自分こそ「受ける側」であったということです。…物質的には何も持っていないに等しい人々でしたが、感謝の心を教えてくれました。失業や栄養不足、多くの病気の中で苦闘していましたが、喜ぶ心を教えてくれました。抑圧され搾取されていましたが、共同体を教えてくれました⁷⁴。

ナウエンは中南米の経験を胸に、次の働き場を求めてジェネシー修道院に籠った。そこで、自分は中南米で直接働くのではなく、北米の知的世界に彼の地の状況を伝えることが使命だと悟る。そして、解放の神学とキリスト教霊性を教えるようにというハーバード大学からの教授就任の招聘を受諾した。この決断には、彼の地の貧しい人々から北米の人々は学ぶべきものがあるというナウエンの確信が込められている。「中南米の人々が私たちを必要としているのと同じように、私たちもその人々を必要としているのです。一つの体のいろいろな肢体が、お互いを必要としているのと同じです」⁷⁵。それは途上国から先進国に宣教師として赴く、一種のリバース・ミッション (reverse mission) であった⁷⁶。

他者に対するナウエンの思想と実践は、ひとは神とどこで出会うか、神の言葉をどこに聞くかという、啓示理解をめぐる現代カトリックの潮流と共鳴する。原敬子によると、このような問いの萌芽は第二バチカン公会議に見られる。『啓示憲章』の第二章「神の啓示の伝達について」では、諸伝承としての個々の資料や習慣を包括した概念として「伝承そのもの」を規定することで、啓示の伝達行為が行われるところの人間経験に視線を向けることを可能にしたという⁷⁷。啓示を固定的なものとしてのみ理解せず、人間の行為や交わりという生きた伝承そのものにおいて受けとめていくという、動的な理解が明らかにされたということである⁷⁸。

原はまた、「神の救済的活動が、実際に、ナザレのイエスにおいて起きるかどうかという問題は、ある程度、経験として立証されるべき」⁷⁹と語ったスヒレバークスを念頭に、近年の解釈学的神学も、神の啓示を人間が他者と出会ってきた経験の中に見出そうとしてきたと述べる⁸⁰。そして、従来のキリスト論的言説が人間的な領域の外に意味をおくアプローチを取ってきたことに対し、人間的な領域の中にイエスを物語るろうとすることを指摘する⁸¹。神の啓示は聖書に証しされたイエス・キリストの物語を通して見出されるが、そのイエスの物語をひとは他者との出会いの経験を通して受容するということである。

ナウエンがこのような理解を神学理論として展開した形跡は見られない。しかしその人生の歩みの中で、他者との出会いを通して神と出会うことを体験的に学んでいった。ナウエンは中南米での経験後もしばらくは学問世界に身を置いていたが、葛藤の末、ジャン・ヴァニエによって創設されたラルシュ・デイブレイクに身を置く決断をする。ナウエンのラルシュ経験は、重度の障がい⁸²を持ち、若くして亡くなった青年アダムの介助者となったことに集約される。彼との出会いをもとに書かれた『アダム』(1996年)⁸³は、まさに人間的な領域の中にイエスを物語る試みであり、ナウエンが文字通り「からだ」を持ってイエス・キリストを見出していった様子が描かれている。

5、「キリストのからだ」の身体的把握

ナウエンは『アダム』において、文字通り寝食を共にした一人の人間アダムの人生を、イエスの人生と重ね合わせることで語っている。イエスを通してアダムを語り、アダムを通しイエスを語る。「イエスはその弟子たちに身体的に現臨していた。アダムはわたしに身体的に現臨していた」⁸⁴。「彼にとって、神は決して知的ないし情緒的な探求の題目ではなかった。彼が神に愛されていることや神に似ていること、さらに彼に平和の使命（ミッション）が託されていることは、イエスの場合と同じく、彼を神から遣わされた者として喜んで受け入れる者たちだけが認知できる事柄だった」⁸⁵。

かつてイエス自身、周囲から「ナザレから何の良きものが出ようか」（ヨハネ1:46）と言われた。アダムはこの世の一般的な価値観から言えば、最も下に見られるような存在である。しかしナウエンはそのアダムにイエスを見出した。ナウエンはアダムと神学議論をしたのではない。ただアダムの口に食べ物を運び続ける日常の中で、イエスの現臨に触れたのだった。ナウエンは、自分がラルシュに来ることを決めたのは自分の霊的探究のためだったと告白しつつ、次のように述懐する。

ここにいることによって知的障がい者がどんな贈り物か、そして何とすばらしい人間関係が持てるか発見しました。しかし今になってそのことが分かってきたのであって、その時はそれに惹かれて来たわけではなかったのです。…ラルシュは知的障がい者が「正常」になるように助けるところではなく、障がい者の持つ霊的賜物を世界と分かち合うのを助けるところなのです。心の貧しい人は私たちの回心のために私たちに与えられているのです⁸⁶。

若くして亡くなったアダムを偲びつつナウエンは語る。「『君は体なのだ。言葉を肉体から切り離してはだめだ。君の言葉は肉となり、肉のままでなければならないんだ』とわたしに言っているかのようなようだった」⁸⁷。「わたしは人生で最も欲していたもの——愛、友情、共同体、深い帰属——を彼と一緒に発見しつつあったのだ」⁸⁸。ナウエンはまた、ラルシュ・デイブレイク全体の司牧者として司ったミサの経験から、次のように述べている。

イエスは「ちょっとかじって、ちょっと飲みなさい」とは決して言わなかったと気づきました。彼は「食べなさい、そして飲みなさい」と言ったのです。十分に食べて、飲みなさい！ そして私は急にたくさんの方が、いろいろなふうにご飯を食ったり飲んだりしているのを見ました。今まで、私が20年間批判的であった一つの

言葉、「聖変化」、という言葉を使い使えるということが分かりました。…あなたも私も、御言葉の秘儀に囲まれ、それに触れ、いただき、飲み、…という時に新しくされているのです。その全てが、私たちに新たにする一つの聖変化の一部なのです⁸⁹。

ノウエンは、イエスの物語とそのイエスによって結ばれた人々との、文字通り「からだ」を伴った交わりを通し、パンが「キリストのからだ」に変化する神秘を理解した。日常の食卓で裂かれ、食されるパンが、キリストの生きた姿を現出させる共同体（交わり）を生み出し、支えるとき、そこにキリストがからだをもって現臨しているとされる。その点で、ノウエンの聖餐理解と実践は、実体変化（聖変化）を関係性で捉え直したスヒレバークスの聖餐理解に棹差すものであった⁹⁰。

もともとノウエンはトラピスト修道士トーマス・マートンに共感していた⁹¹。マートンは道教や禅仏教から多くを学んだ20世紀アメリカを代表する神秘家・霊性思想家である。ノウエンはマートンを通し、西洋文化が「自己」に捕らわれ過ぎていること、特に、計量できる成果や言葉に捕らわれることの危険を学んでいた。それゆえ中南米を訪れ貧しい人々に出会ったのであるが、その時には、惹かれつつも彼らの共同体に身を投じることはできなかった。しかしラルシュに来て、貧しさや苦難を象徴するアダムと食事を共にする日常を通し、東洋的な自己超越とは違う身体性をともなった共同体経験に導かれた。

ノウエンは自身の「からだ」をもって「キリストのからだ」を味わうに至った。それはしかし、ラルシュでの歩みが順風満帆であったことを意味しない。典型的な学者タイプの間人であったノウエンは、新しい生活に慣れるのに非常に苦労した。さらに追い打ちをかけたのは、以前から心を通わせていた友人との友情の破綻である。ほとんど同性愛的とも言えるノウエンの思いは、その友人には重すぎた。結果、ノウエンは極度のうつ症状を呈することになり、半年間ラルシュを離れて精神病者の施設に入院することになった⁹²。

パネンベルクが一致の終末論的シンボルとして教会や聖餐を捉えたように、ノウエンが求めた「キリストのからだ」の親密な交わりは、終末以前のこの世界にあっては完成を見ることがなかったと言えよう。しかしなお、聖餐が一致のシンボルであることに変わりはない。ノウエンはラルシュでの精神的危機を経て、「最近の体験は、聖餐式が共同体を表現するだけでなく、これを作り出すことを教えてくれた」⁹³と告白している。真実のコミュニティ経験を狂おしいほどに求め続けたのがノウエンの人生であり、彼にとって聖餐はその人生を歩むために不可欠の手段となっていた。

その点で、ノウエンはカトリックの公式見解を踏み越えた面がある。確かに「洗礼

は聖餐への扉を開いてくれます』⁹⁴と記しているように、通常は洗礼が聖餐に先行するものであることを理解していた。しかしナウエンは聖餐を正式な典礼の時だけでなく、滞在先のホテルや友人宅などで自由に行っていた。それも、カトリック信徒である無しにかかわらず、たとえば夕食の食卓を囲みながら行っていたのである⁹⁵。かつて数か月滞在したジェネシー修道院でも、ナウエンを慕い訪れた非カトリックの人々を聖餐に招き、修道院長を悩ませていたという⁹⁶。

なるほど第二バチカン公会議がある種の柔軟さを与えたのは確かである。『典礼憲章』には、「真の本来の典礼精神の諸原理と適合するものであるかぎり、時にはそれを典礼そのものの中にも取り入れる』⁹⁷との文言が含まれている。しかし、公会議を経てなお位階制を重んじるカトリックでは、「たとえ司祭であっても、自己の考えで典礼に何かを加えたり、削除したり、変更したりしてはならない』⁹⁸と規定されている。

教派的伝統や神学的主張の違いは時に高い壁を築き、聖餐理解の違いがそれを促進することさえあり得る。ナウエンが属するカトリックも、第二バチカン公会議を経てなお、他のキリスト教諸派と十分な相互聖餐には至っていない。ナウエンはその実状を承知しつつも、人々やその人々が神とどのような関係を築いているかのほうが、教会法を守ることに執着することよりも大切だと考えていた⁹⁹。人々を一つに集めることと聖餐は切り離せないと確信し、その確信に従って行動したのである。ナウエンは、聖餐が人類全体に与えられた賜物であることを「からだ」で学び取った¹⁰⁰。

6. まとめ

パネンベルクやウイリモンは、教会共同体を意識しつつ聖餐を日常の食事の側面で捉えるよう促した。それは第二バチカン公会議やスヒレバークスの思想にも通じており、さらにそれを自由に進めていったのがナウエンであった。ナウエンは聖餐論を組織的に構築したわけではない。しかし神や人々との深い交わりに生きようと試み、その経験を物語ることによって自身の思想を展開していった。言葉を十分持たないアダムのような人々、また中南米で困難な状況に苦しむ人々との交わりを通し、観念や抽象という鎧を取り払った生身の身体性を学び取った。

ナウエンはその点で受肉の信仰にこだわったと言える。神はイエスという「からだ」を取ってこの世界に来て、自身を啓示した（受肉）。それは神を、まさに共に食卓を囲むほどに「目で見えて、触るように」体験的に知るためであった。しかし神の啓示はイエスとして現れたことに留まらない。父なる神が子なるイエスをこの世界に遣わして御心を広めようとされたが、そのイエスが天に戻る際、弟子たちにその使命を

託したからである（ヨハネ20:21）。ナウエンは言う。

私たちが聖餐を祝うごとに、イエスは天より下り、パンとワインをとり、聖霊の力によって、私たちの食べ物、飲み物となってくださいます。実に、聖餐を通して、どのような時でも、神が人となられたという出来事は起こり続けているのです。…実は、イエスのご自分と同じ時期に生きていた友によりも、さらに私たちの近くにいてくださいます。今日イエスは私たちの日毎のパンになられたのですから¹⁰¹。

「キリストのからだ」なるキリスト者共同体は、聖餐の出来事を通して神の受肉を継続する器であり、この時代においてイエスを「目で見て、触るように」人々に示す存在だということである。こうしてナウエンは、聖餐として「キリストのからだ」を食する人々によって形成される「キリストのからだ」なる共同体が、制度としての教会である以前に、まずもって有機的なコミュニティであることを明らかにした。

今日、カトリック教会はもちろんのこと、プロテスタント諸教会もそれぞれ長い歴史を持つに至っている。そして一般に、長い歴史と伝統の中で造り上げられてきた制度は、しばしばその制度自体を目的とするようになる。しかしキリスト教における制度とは、本来、神や人々との豊かな交わりを促進するために設けられているはずである。その点で、自由で日常に根差した聖餐理解とそれに基づく有機的なコミュニティ形成というナウエンの試みは、教会が顧みるべき一つの方向性を指し示しているように思われる。

* 本稿は日本基督教学会近畿支部会（2018年3月）の発表をもとに作成した。

注

- 1 邦訳 W. パネンベルク『現代キリスト教の霊性』西谷幸介訳、教文館、1987年、42-43頁。以下、邦訳がある文献は随時参照。
- 2 同書、39頁。
- 3 同書、52-54頁。パネンベルクは、個々の信仰者全体の共同体性の強調をもって真正な教会概念を回復させるものとして、『十二使徒の教訓』（ディダケ）が描く次のイメージを高く評価する。「聖餐式で裂かれ、配られるあのかたまりのパンも多くの小麦の一粒一粒が集まってそれを形造っているように、キリストとの交わりにおける一つのパン、一つの杯、一つのからだも多くの信仰者たちが共に集められてこれを形成している」（同書、51-52頁）。初期ルターはこのイメージを重視していたが、まもなく悔悛の敬虔を補助する聖餐理解に変わっていったという（同書、52-53頁）。
- 4 ウィリアム・ウィリモン『教会としての礼拝 祭司職への召命』越川弘英訳、新教出版社、2002年、

- 229頁。
- 5 同書、227頁。
- 6 同書、224-225頁。
- 7 同書、226頁。そもそも、イエスの弟子たちは食事の席において復活のイエスをはっきりと認めたのであり、初期教会の人々が集う場所も食卓のまわりであった（同）。
- 8 ウィリアム・ウィリモン『礼拝論入門 説教と司式への実践的助言』越川弘英・岩見育子訳、新教出版社、1998年、70頁。
- 9 同書、75頁。
- 10 パネンベルク、前掲書、61-62頁。
- 11 同。
- 12 同書、43-50頁、62-67頁。
- 13 同書、57頁。世界教会協議会（WCC）の聖餐論については以下を参照。神田健次『現代の聖餐論 エキュメニカル運動の軌跡から』日本基督教団出版局、1997年。また、以下で引用・参照する第二バチカン公会議の公文書（『エキュメニズムに関する教令』、『現代世界憲章』、『典礼憲章』、『教会憲章』）はすべて次による。カトリック中央協議会監修『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』カトリック中央協議会、2013年。なお引用は慣例によりページ番号ではなく章節によって表記する。
- 14 『エキュメニズムに関する教令』、序文。
- 15 同。
- 16 『現代世界憲章』、結語。
- 17 1994年、アメリカ合衆国において3400人のプロテスタント牧師たちに行われた調査によると、最も影響を受けた人物として第二位にヘンリ・ナウエンが選ばれたという（Deirdre LaNoue, *The Spiritual Legacy of Henri Nouwen*, Continuum, 2000, p. 49）。
- 18 聖餐は、「聖体祭儀」「ユーカリスト」「主の晩餐」「主の食卓」「パン裂き」など多様な言葉で表されるが、文脈によって使い分ける。
- 19 霊性は学術用語として定義が確定していないが、暫定的に、キリスト教的な「生のかたち」として用いる。
- 20 聖餐については今日、執行方法を中心に活発に議論されている。しかし本論考の目的は、「キリストのからだ」理解を軸としてナウエンの聖餐理解を明らかにすることである。
- 21 Henri Nouwen, *Can You Drink the Cup?*, Ave Maria Press, 1996. =ヘンリ・J・M・ナウエン『この杯が飲めますか』廣戸直江訳、聖公会出版、2001年。
- 22 邦訳同書、3-4頁。
- 23 同書、6-7頁。
- 24 wineは邦訳により「ぶどう酒」となっている場合もあるが、すべて「ワイン」に統一。
- 25 ナウエン、前掲書、8頁。
- 26 『典礼憲章』、第一章、Ⅲ、A。および同、第一章、Ⅲ、C。
- 27 小高毅『ローマ・カトリック教会における聖体祭儀』『まことの聖餐を求めて』芳賀力編、教文館、2008年、106頁。
- 28 Michael O'Laughlin. *Henri Nouwen: His Life and Vision*. Orbis Books, 2005, p. 42.
- 29 Ibid., pp. 36-37.
- 30 Ibid., pp. 38-39.
- 31 Ibid., pp. 38-42.

- 32 Michael O'Laughlin, *God's Beloved: A Spiritual Biography of Henri Nouwen*, Orbis Books, 2004, p. 112.
- 33 Henri Nouwen, *Creative Ministry*, Image Books, 1978, p. 105.
- 34 アリスター・マクグラス『キリスト教神学入門』神代真砂実訳、教文館、2002年、711-712頁。
- 35 Edward Schillebeeckx, *The Eucharist*, A & C Black, 2005.
- 36 *Ibid.*, pp. 107-113.
- 37 *Ibid.*, p. 113.
- 38 *Ibid.*
- 39 *Ibid.*, pp. 110-111.
- 40 この姿勢は『現代世界憲章』が告げる次の姿勢にのっとっている。「神学者は神学独自の方法と規則を用いながらも、つねに同時代の人々によりよく教理を伝える方法を見いだすように求められている。…ただし、信仰の諸真理には同じ趣旨、同じ意味が維持されなければならない」（『現代世界憲章』、第二部、第二章、第三節）。
- 41 同、前置き。
- 42 ファーガス・カー『二十世紀のカトリック神学 新スコラ主義から婚姻神秘主義へ』前川登・福田誠二訳、教文館、2011年、99頁。
- 43 O'Laughlin, *Henri Nouwen*, p. 41.
- 44 Henri Nouwen, *With Burning Hearts: A Meditation on the Eucharistic Life*, Orbis Books, 1994. = ヘンリ・ナウエン『燃える心で』景山恭子訳、聖公会出版、1999年。
- 45 O'Laughlin, *God's Beloved*, p. 114.
- 46 ナウエン、邦訳前掲書、68頁。
- 47 小原克博「不在者の倫理 —科学技術に対する宗教倫理的批判のために—」『宗教と倫理』第16号、6-10頁。なお、聖書学者ジョン・ドミニク・クロッサンもイエスの言動に共食を見出している（『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』太田修司訳、新教出版社、1998年、120-123頁）。
- 48 ナウエン、前掲書、64頁。
- 49 同書、66頁
- 50 同書、73頁。
- 51 同。
- 52 同書、74頁。
- 53 同書、75-76頁。
- 54 聖アウグスティヌス『告白』上巻、服部英次郎訳（改訳）、岩波書店、1976年、5頁。
- 55 ナウエン、前掲書、74-75頁。
- 56 同書、83頁。
- 57 『教会憲章』、第一章。カトリック教会は7つの秘跡を堅持しているため、教会は sacrament そのものではない。それゆえ、『教会憲章』において、教会はいわば秘跡（sacrament）と表現された。
- 58 川中仁「第二バチカン公会議の教会理解」『あなたの隣人はだれか 現代における共生の行方 2011年上智大学神学部夏期神学講習会講演集』宮本久雄・武田なほみ編著、日本キリスト教団出版局、2012年、99-100頁。
- 59 『教会憲章』、第二章。
- 60 川中、前掲書、102-103頁。
- 61 『教会憲章』、第三章。
- 62 川中、前掲書、105頁。

- 63 Edward Schillebeeckx, *Christ the Sacrament of the Encounter with God*, Sheed & Ward, 1987, p. 15.
- 64 ナウエン、前掲書、86頁。
- 65 同。
- 66 ヘンリ・ナウエン著、マイケル・オラーリン編『ナウエンと読む福音書 レンブラントの素描と共に』小渕春夫訳、あめんどう、2008年、50頁。
- 67 同。
- 68 ナウエン『燃える心で』、96-97頁。
- 69 同書、95頁。
- 70 同書、95-96頁。
- 71 同書、96頁。
- 72 同書、97頁。
- 73 同書、102-103頁。
- 74 Gustavo Gutiérrez, *We Drink from Our Own Wells: The Spiritual Journey of a People*. Orbis Books, 2003, p. xx.
- 75 ヘンリ・J・M・ナウエン著、ジョン・ディア編『平和への道』廣戸直江訳、聖公会出版、2002年、207頁。
- 76 ミッシェル・フォード『傷ついた預言者 ヘンリ・ナウエンの肖像』廣戸直江訳、聖公会出版、2009年、208頁。
- 77 原敬子『キリスト者の証言 人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察』教文館、2017年、93-94頁。
- 78 同書、98-99頁。
- 79 Edward Schillebeeckx, *Jesus: An experiment in Christology*, trans. By Hubert Hoskins, Harper Collins, 1983, p. 618. 原、前掲書、75頁からの再引用。
- 80 原、同書、80頁。
- 81 同書、85頁。
- 82 これ以降、引用文も含め「障害」や「障碍」をすべて「障がい」に統一する。
- 83 Henri Nouwen, *Adam: God's Beloved*, Orbis Books, 1997. =ヘンリ・J・M・ナウエン『アダム』[改訂新版] 宮本憲訳、聖公会出版、2013年。
- 84 邦訳同書、12頁。
- 85 同書、34頁。
- 86 ナウエン『平和への道』、246-247頁。
- 87 ナウエン『アダム』、59頁。
- 88 同書、60頁。
- 89 ナウエン『平和への道』、283-284頁。
- 90 Schillebeeckx, *The Eucharist*, pp. 107-144.
- 91 ナウエンは初期にマートンについて著作を出している (*Thomas Merton: Contemplative Critic*, 1972)。数度改版されて現在は Henri Nouwen, *Encounters with Merton: Spiritual Reflection*. The Crossroad Publishing Company, 2004.
- 92 O'Laughlin, *Henri Nouwen*, pp. 129-132.
- 93 ヘンリ・J・M・ナウエン『いのちのしるし キリスト者の視点から見た親しさ、豊かさ、喜び』宮澤邦子訳、女子パウロ会、2002年、123-124頁。

- 94 ヘンリ・J・M・ノウエン『今日のパン、明日の糧』〔改訂版〕嶋本操監修、河田正雄訳、聖公会出版、2003年、328頁。
- 95 フォード、前掲書、7頁。もしカトリックの洗礼を受けていない自分の家族が定期的に聖餐を受けることを希望する場合には、教会に正式に属するよう促しながらも、それを条件にして強制することはなかったという（同）。
- 96 同書、192頁。
- 97 『典礼憲章』、第一章、Ⅲ、D。
- 98 同、第一章、Ⅲ、A。
- 99 フォード、前掲書、8頁。
- 100 同書、174頁。
- 101 ナウエン、前掲書、334頁。